

## 最優秀賞

神奈川県教育長賞

### 母がくれたプレゼント

寒川町立旭が丘中学校

三年 笹生

葵

私が生後一ヶ月頃のこと。母がある変化に気がついた。表面が母のように赤く、つぶつぶした感じにもり上がっている物が頭に三つあることに。それは、母状血管腫というものだった。三つのコブはどんどん大きくなっていった。生後五ヶ月頃には、直径二〜三センチ程の真っ赤なコブとなっていて、小さな頭に三つのコブはとも目立っていたそうだ。母は私のコブを人に見られたくないため、それらを隠す帽子を用意した。外出する時には私に帽子をかぶせたが、私が嫌がつて取ってしまうことがよくあった。三つのコブを見た人は必ず驚く。そのあと、母や私にどう声をかけたらよいのかわからず無言になる。または、かわいそうね、どうしたの？と、私ではなくコブに興味津々になる。母は、どんな人にも笑顔で対応したが、

心では泣きそうな時もあり、私が簡単にとれない帽子は、外出の必需品となった。

しかし、ある日の病院の外来をきつかけに母の思いが変わった。待合室で、4〜5才程の女の子が私に近づいてきて私の頭をなでた。その時に帽子がとれて、三つのコブがあらわになった。母はハツとした。すると女の子は私のコブをツンツンと触り、ニコニコしながら、

「これ、かーいーね（かわいいね）イチゴ。」

と言った。母は、女の子のかわいらしい様子と、ツンツンされてニコニコしている私を見て、思わず笑ってしまい、女の子に「ありがとう。」と伝えると、涙が出てしまった。女の子のママは慌てて「すみません」と母に伝えると、女の子の方をむいて話し始めた。

「○○ちゃん、この苺ちゃんは、赤ちゃんの大事な苺ちゃん、沢山の幸せをプレゼントするために神様が空から見つけやすいように印をつけてくれたの。触ってはいけません。」

と。それを聞いていた母は、目の前が明るくなるのを感じた。女の子のママは、女の子に発達の遅れがあること、それを知ったママはショックだったこと、でもおかげで今まで知らなかった障がい者や家族の思いを知ることができてよかったと思っていることなどを話してくれたそうだ。この日から、帽子は外出の必需品ではなくなった。

あの日から今日まで、街中や施設ではバリアフリー化が進み、母がベビーカーと私を抱えて階段を上り下りした駅にもエレベーターができた。二〇一六年には、障害者差別解消法が施行され、ハード面はよくなっているように感じる。しかし、健常者と障がい者の間の心のバリアフリーは、まだまだだと感じる。参議院に当選された二人の重度障がい者への冷たい

コメントや、車いすの人を入店拒否するなど、障がい者の方々には世間の心ない反応に、今もなお日常的にさらされている。きっと母は、そんな現状に娘をつれ出して悲しい思いや切ない思いを感じたくないから、私の母を隠していたのだろう。そんな母にとつて病院で出会った親子の言葉は本当に嬉しかったと思う。私は、あの親子が様々な人と関わって色々感じてきたからこそ、母の抱えていた痛みも感じとつて下さったのだと思う。多くの健常者が障がい者と当たり前のように接する機会も少なく、理解を深めていないから心のバリアフリー化に時間がかかっていると私は思う。

インド独立の父、ガンジーの言葉に、

「世界でおこつてほしいと思う変化に、あなたがなることです。」

とある。母の心を明るくして下さった親子のように、私も誰かの心を明るくしてあげられる人になりたい。そんな優しさの輪が広がっていけば、障がい者があるままに安心して生きていけるような社会になると思う。

あの時の私の母は消えたが、母は、私の心にバリアフリーという素敵な幸福のプレゼントをくれた。